

生徒一人一人の学力向上を目指して

～教師の授業力向上と生徒の学習習慣の改善を通して～

多治見市立南姫中学校 教諭 松浦一信

概 要

昨年度に実施した岐阜県学力状況調査の結果から、本校生徒の学力は十分に身に付いていない状況にあることが分かった。さらに、基礎的・基本的な知識及び技能の定着が十分でないために、それらを活用して考え、判断したり表現したりする力が育まれていないことも分かった。そして、教師や生徒を対象にしたアンケート調査より、教師の指導の在り方並びに生徒の学習習慣に起因していることが明らかになった。

このことから、授業力向上に向け、学習内容を体系化させながら、考えを広げ深められるような指導へと改善を図るとともに、家庭学習を充実させる取組を行ったり、学び直しの機会を設けたりして生徒の学習習慣の改善を図れば、生徒一人一人の学力を高めることができると考えた。

そこで、研究主題を「生徒一人一人の学力向上を目指して～教師の授業力向上と生徒の学習習慣の改善を通して～」とし、実践を進めることとした。

1. はじめに

(1) 生徒の実態

①岐阜県学力状況調査から

昨年度実施した岐阜県学力状況調査は、すべての教科において県の平均正答率を下回る結果となった【図表1】。

	国語	社会	数学	理科	英語
県平均正答率	68.2%	57.9%	56.4%	55.6%	52.3%
本校正答率	■%	■%	■%	■%	■%
差(本校-県)	▲■	▲■	▲■	▲■	▲■

【図表1 平均正答率比較表】

数学においては、正答率を『主として「知識」に関する問題（以下「A問題」という）』と、『主として「活用」に関する問題（以下「B問題」という）』に分けて県の正答率と比較してみると、A問題B問題いずれも県の平均を下回っていることが分かる。中でもB問題に着目すると、説明を問う問題の正答率が、B問題の正答率を押し下げていることが読み取れる。【図表2】。

数 学	全体	A問題	知識を問う問題	技能を問う問題	B問題	説明を問う問題
県平均正答率	56.4%	59.7%	62.1%	60.2%	50.4%	45.4%
本校正答率	■%	■%	■%	■%	■%	■%
差(本校-県)	▲■	▲■	▲■	▲■	▲■	▲■

【図表2 数学の正答率内訳】

さらに、A問題の正答率に着目し、県平均正答率との開きがある問題を取り出すと、基礎的な概念の理解に弱さがあること、数量関係の捉えとその表現技能に弱さがあることが分かる【図表3】。

観点	出題の意図	県正答率	本校正答率	差(本校-県)
知識	10 一次方程式の意味を理解している	45.3%	■%	▲■
	14 円錐の体積を、底面が合同で高さが等しい円柱の体積との関係で理解している	43.3%	■%	▲■
	15 関数の意味を理解している	34.7%	■%	▲■
技能	6 数量の関係を文字式で表すことができる	28.4%	■%	▲■
	7 文字の関係を不等式で表すことができる	63.1%	■%	▲■
	16 与えられた比例のグラフから、xの変域に対応するyの変域を求めることができる	52.3%	■%	▲■

【図表3 出題項目別正答率】

これらのことより、数学では、基礎的・基本的な知識及び技能が十分に身に付いていないために、それらを活用して考え、判断したり表現したりする力が育まれていないと考えることができる。

こうした側面で、改めて5教科の問題種別正答率を見ると、他の教科においても、数学と同様のことがいえると考えられる【図表4】【図表5】。

		国語	社会	数学	理科	英語
正答率	A問題	■%	■%	■%	■%	■%
	B問題	■%	■%	■%	■%	■%

【図表4 問題種別正答率】

【国語】

- ・中学校2年生までに習った漢字を正しく読むことが弱い。
- ・表現の技法を正しく理解することが弱い。表現技法の名前は知っているが、その用法がわかっていない。
- ・話の論理的な構成や展開などに注意して聞き、自分の考えと比較することが弱い。集中して聞き取る習慣が身に付いていない。
- ・叙述の仕方を確かめて、読みやすく分かりやすい文章にすることが弱い。文章を書いても推敲する習慣が身につけていない。
- ・場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容の理解に役立てることが弱い。

【社会】

- ・文字や言葉だけの理解に終始しているため、なかなか基本的な用語や出来事・人物名などが定着していない。
- ・歴史上の人物と、その人物の業績を示してカードを、時代順に並べ替える問題の正答率が低い一方で、文化の内容を示したカードを並べ替える問題は県平均を上回っている（文化に関しては、古代～江戸までのように時代を貫いて年表化して整理しているのに対し、政治に関しては時代ごとに年表化していることに要因があると考えられる）。
- ・事実をその時の社会情勢を踏まえて説明すること（当時の状況、歴史的・地理的背景を根拠に考えていく力）に弱さがある。

【理科】

- ・用語（科学的な言葉）の意味の理解が不十分である。また、用語を覚えていない。
- ・気体の性質や作り方、薬品の名前、性質など、学習して得た知識が正しく定着していない。
- ・実験を行う目的と正しい結果を得るための操作方法や対照実験の内容を結びつけて考えることができない。
- ・実験器具を正しい扱い方ができない。扱い方の知識があっても、技能が伴わない。
- ・データをグラフに書き表すことが正確にできない。
- ・実験の結果から考察したことを、根拠を示しながら説明することが難しい。
- ・図やグラフからわかることを自分の言葉でまとめることが難しい。

【英語】

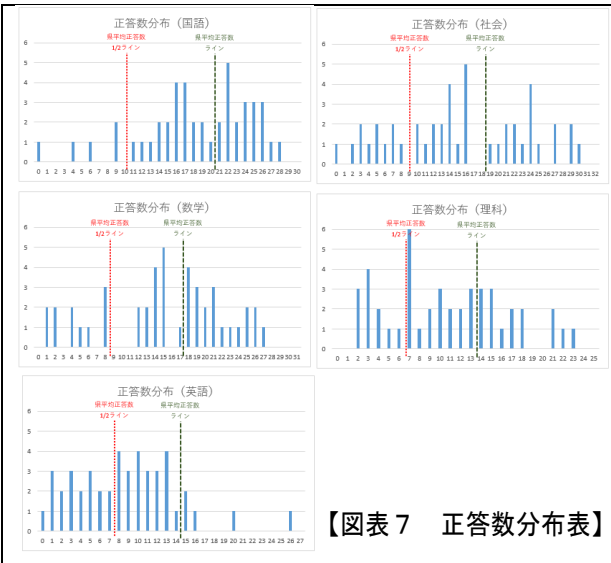
- ・改善の大元として単語の知識、正しい文章の知識の定着が不十分であり、全ての領域において、単語の意味や読み方が分からない。単語の意味や読み方が分かっても、実際に文章を書けないし、読み取れないという現状がある。
- ・whyにはbecause、give (show) 十人十物のような構文・文法の理解に弱さがある。
- ・対話文の前後のつながりを押さえられてない。
- ・文章の広げ方を十分に理解していないため、5文の英作文を書けない。

【図表5 各教科主任による岐阜県学力状況調査の分析】

次に個々の正答数に着目してみる。県平均 1/2 以下の生徒の割合を見ると、本校では、各教科約 10%～40%の生徒が該当していることが分かった【図表6】。さらに正答数を分布図で表してみると、【図表7】のようになった。

	国語	社会	数学	理科	英語
受験者数	45	45	45	45	45
県平均以下1/2以下の生徒数	4	4	4	4	4
県平均以下1/2以下の生徒割合	9%	9%	9%	9%	9%

【図表6 県平均 1/2 以下の生徒割合】



【図表7 正答数分布表】

この結果より、社会・数学は分布が2極化していることから、国語を含め3教科については、まずは県平均 1/2 以下の生徒の底上げが必要であるという課題が明らかになった。理科・英語については、分布図の山が左寄りになっていることから、全体的に確実に学習内容の定着を図れるよう早急な対応が求められていることも明らかになった。

②生徒の家庭学習の実態調査から

昨年度の後半に、生徒に対して、「学校の授業時間以外の学習」についての調査を行い、実態を明らかにした【図表8】。

	3時間以上	2～3時間	1～2時間	0.5～1時間	0.5時間未満	しない
(1)-1 家庭学習(家で自主的)を、普段(月)～(金)、1日当たりどれくらい(の時間)勉強していますか	5.5	10.3	28.3	32.4	10.3	13.1
(1)-2 学習塾や家庭教師などを利用した学習を、普段(月)～(金)、1日当たりどれくらい(の時間)勉強していますか	26.9	21.4	11.7	2.1	0.7	37.2
(2)-1 家庭学習(家で自主的)を、休日に1日当たりどれくらい(の時間)勉強していますか	11.7	9.7	29.7	17.2	13.8	17.9
(2)-2 学習塾や家庭教師などを利用した学習を、休日に1日当たりどれくらい(の時間)勉強していますか	16.6	3.4	6.2	3.4	2.8	67.6

	満足している	満足していない
(3) 家庭学習の時間数は、満足できるものですか	22.8	77.2

	当てはまる	(1)-1、(1)-2、(2)-1、(2)-2すべてで1時間未満の学習
(5)-1 学習塾以外の習い事などがあって、家庭学習する時間がない	13.1	(5)-1該当生徒 2.1
(5)-2 家庭学習をしようとは考えているが、家に集中して学習する環境がない	9.7	(5)-2該当生徒 2.8
(5)-3 家庭学習よりも、テレビを見たり携帯電話を使ったりするなど、他のことに時間を使ってしまう	50.3	(5)-3該当生徒 14.5
(5)-4 家庭学習をしたいとは考えているが、何をしていたのか分からないため、家庭学習を進められない	19.3	(5)-4該当生徒 9.0
(5)-5 家庭学習をしたいと考えているが、どのように勉強していいのかわからないため、家庭学習を進められない	26.2	(5)-5該当生徒 9.7
(5)-6 学校の授業の内容が分かりきっているため、家庭学習を取り組んでも、思うように進まないし、やる気もなくなってくる	21.4	(5)-6該当生徒 7.6
(5)-7 その他	6.9	満足していると回答した生徒 4.1

【図表8 学校の授業時間以外の学習についての実態調査】

この結果により、本校の生徒は、全校的に学習塾依存型の学習がなされており、約60%が家で自主的に取り組む家庭学習（以下「家庭学習」という）の実施時間が1時間未満であることが明らかになった。また、その一方で、生徒の約80%の生徒が現在の家庭学習の時間数に満足していないと考えていることも分かった。そして、その原因に「テレビや携帯電話等のネット環境が家庭学習の妨げになっている」という家庭環境に起因するものと、「何をしていたのか分からない」「どのように勉強していいのかわからない」「学校の授業の内容が分かりきっていないため、家庭学習を取

り組んでも、思うように進まない」という学習方法に起因するものがあることが分かった。

さらに、学習塾、家庭学習ともに実施時間が1時間未満の生徒が全体の約20%いることも分かった。

(2) 教師の指導の実態

昨年度の自己評価において、教師に対して、授業に関わる次のような調査を行った【図表9】。

能を活用し、思考力、判断力、表現力等を育てることに重点を置いた授業を計画したか」については、「当てはまる」の回答が約30%であったことや、質問(7)「授業の中で様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導はしたか」の回答は約30%、質問(8)「授業の中で事柄や事実を見いだすような発問をし、生徒に事実・事柄の説明できる場を意図的に設けたか」は約

領域 教科	質問 番号	質問事項	割合			
指導計画	(1)	授業の役割を考え、知識・技能の習得すること、定着を図ることに重点を置いた授業を計画していますか	61.5	38.5		
指導計画	(2)	授業の役割を考え、知識・技能を活用し、思考力、判断力、表現力を育てることに重点を置いた授業を計画していますか	30.8	53.8	15.4	
指導方法	(3)	学習の系統性を捉え、授業の中で意図的に既習の学習内容とつなげたり、関連付けたりできるような活動を取り入れていますか	38.5	30.8	23.1	7.7
指導方法	(4)	授業の中で目標(ねらい・めあて)を示す活動を計画に取り入れましたか	61.5	23.1	15.4	
指導方法	(5)	授業の最後に学習したことを振り返る活動を計画的に取り入れましたか	30.8	46.2	23.1	
指導方法	(6)	教科等の指導のねらいを明確にした上で、言語活動を適切に位置付けましたか	38.5	38.5	23.1	
指導方法	(7)	授業の中で様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしましたか	30.8	30.8	30.8	7.7
指導方法	(8)	授業の中で「どのようなことがいえそうですか(分かりませんか)」「どこから分かりませんか」など、事柄や事実を見いだすような発問をし、生徒に事実・事柄の説明ができる場を意図的に設けましたか	23.1	38.5	38.5	
指導方法	(9)	授業の中で「どのように考えましたか」など、事柄を調べる方法や手順を問う発問をし、生徒に方法・手順の説明ができる場を意図的に設けましたか	30.8	7.7	53.8	7.7
指導方法	(10)	授業の中で「なぜ○○ですか」など、事柄が成り立つ理由を問う発問をし、生徒に根拠・理由の説明ができる場を意図的に設けましたか	38.5	30.8	23.1	7.7
指導方法	(11)	授業の中で発言や活動の時間を確保して授業を進めましたか	53.8	38.5	7.7	
指導方法	(12)	授業の中で学級やグループで話し合う活動を計画的に取り入れましたか	46.2	23.1	30.8	
学習規範	(13)	学習規律(私語をしない、話をしている人の方を向いて聞く、聞き手に向かって話をする、授業開始のチャイムを守るなど)の維持を徹底しましたか	38.5	38.5	23.1	
学習規範	(14)	授業の中で、生徒一人一人のよい点や可能性を見付け、生徒に伝えるなど積極的に評価しましたか	30.8	46.2	23.1	

当てはまる
 どちらかといえば当てはまる
 どちらかといえば当てはまらない
 当てはまらない

【図表9 授業実践についての自己評価】

質問(1)「授業の役割を考えて、知識・技能を習得すること、定着を図ることに重点を置いて授業を計画したか」について、教師の約60%が「当てはまる」と回答しているものの、質問(3)「学習の系統性を捉え、授業の中で意図的に既習の学習内容とつなげたり、関連付けたりできるような活動を取り入れているか」については、約40%の回答にとどまった。本来であれば、新たに獲得した知識・技能が既存の知識・技能と関連付けたり組み合わせられたりしていく過程で、様々な場面で活用される基本的な概念等として体系化されながら身に付いていくことが重要であるが、こうした指導の結果、知識・技能がそれぞれ断片的に習得されたことで、十分に定着しない要因となり、それが岐阜県学力状況調査の結果に結びついたとも考えられる。

また、質問(2)「授業の役割を考え、知識・技

20%、質問(9)「授業の中で事柄を調べる方法や手順を問う発問をし、生徒に方法・手順の説明ができる場を意図的に設けたか」は約30%、質問(10)「授業の中で事柄が成り立つ理由を問う発問をし、生徒に根拠・理由の説明ができる場を意図的に設けたか」は約40%であったことが、岐阜県学力状況調査のB問題の正答率を引き下げた要因としても考えられる。

さらに質問(12)「授業の中で学級やグループで話し合う活動を計画的に取り入れたか」の回答は約45%であった。本来、対話を通じて他者の考え方を吟味し取り込み、自分の考え方の適応範囲を広げることは、多様な思考の在り方を学び、問題発見・解決の手法や主体的に考える力を身に付けるために有効である。しかし、本校では、自己の考えを広げ深める対話的な学びに弱さがあることが分かった。

2 研究主題

前述の実態より、本校生徒の学力は十分に身に付いていない状況にあることが明らかであり、その要因として、教師の授業力と生徒自身の学習習慣が考えられる。以上のことを踏まえ、研究主題を次のように設定した。

生徒一人一人の学力向上を目指して

～教師の授業力向上と生徒の学習習慣の改善を通して～

そして、次のような研究仮説を設定し、実践を行った。

教師が課題解決への見通しをもたせたいうで、新たに獲得した知識・技能と既存の知識・技能を関連付けたり組み合わせたりするとともに、他者の考え方を吟味し取り入れ、自分の考え方の適応範囲を広げられるような対話活動を位置付けた指導をすれば、生徒は学習内容を体系化させながら、考えを広げ深めることができる。また、家庭学習を充実させる取組を行ったり、学び直しの機会を設けたりして学習環境の改善を図れば、生徒の基礎学力の定着につながる。このように教師の授業力向上と生徒の学習習慣の改善を図れば、生徒一人一人の学力を向上させることができる。

学力向上推進委員会

研究推進委員会

(1) 指導方法の工夫

- ・生徒一人一人に課題解決への見通しをもたせるための指導の在り方
- ・生徒一人一人に既習の学習内容を活用し、自分なりの考えをもたせるための指導の在り方
- ・生徒一人一人が本時に考えを広げ深めることができたかを確かめるための評価の在り方

(2) 学び方の工夫

- ・仲間と伝え合うことで、考えを広げ深めるための対話活動の在り方

学力向上推進委員
方向性の検討・検証

学習指導部

- (3) 学習内容をつなぎ、授業を補充するための充実した家庭学習の在り方
- (4) 既習の学習を学び直すためのスクルトレーンダの実施

提案

授業力改善
学習習慣改善
学力向上

実践

全校職員・生徒

【図表 10 学力向上推進体制】

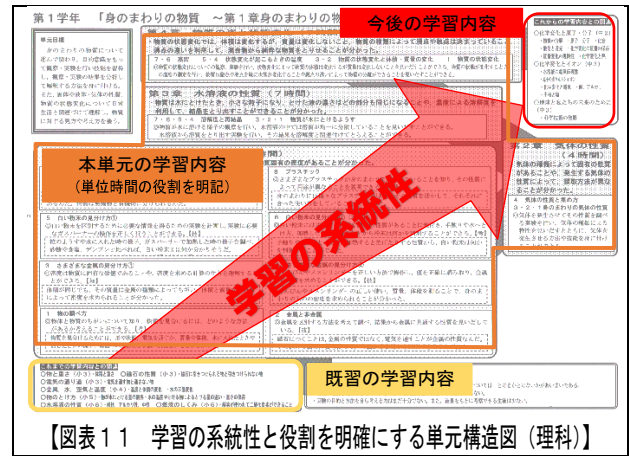
3 実践

(1) 指導方法の工夫

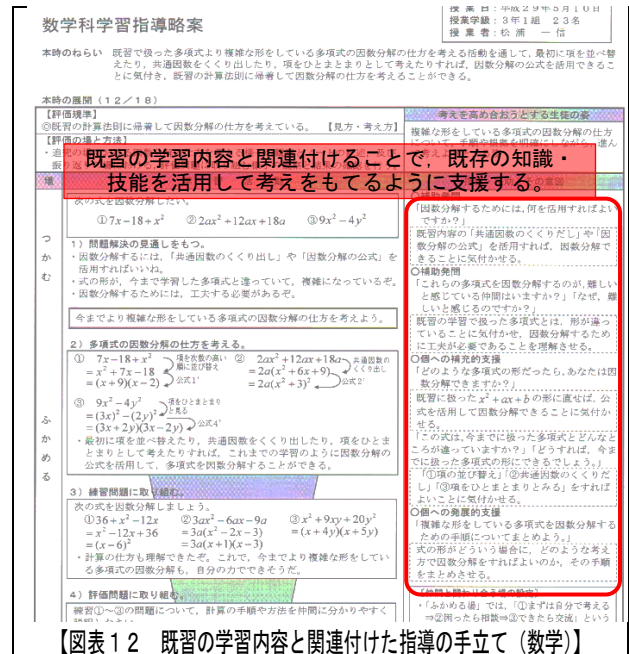
前述したように、生徒に基礎的・基本的な知識・技能が十分に定着していない要因の一つとして、教師が学習の系統性を捉え、授業の中で意図的に

既習の学習内容とつなげたり、関連付けたりできるような活動を十分に位置付けられなかったために、基礎的・基本的な知識・技能の断片的な習得になってしまったことが考えられる。

そこで、まず教師自身が学習の系統性を明らかにしつつ、「本時、どんな力を身に付けることが必要か」「本時身に付ける基礎的・基本的な内容は何か」を明確にした【図表 11】。さらに、生徒の既習の学習内容等の習熟度を見極めたうえで、導入段階や展開段階において、既習の学習内容と関連付けながら問題意識や課題意識を生じさせたり、生徒一人一人のつまずきに応じた指導の手立てを明確にしなが、既存の知識・技能を活用して自己の考えがもてるよう支援したりした【図表 12】。



【図表 11 学習の系統性と役割を明確にする単元構造図(理科)】



【図表 12 既習の学習内容と関連付けた指導の手立て(数学)】

このように、新たに獲得した知識・技能が既存の知識・技能と関連付けられたり組み合わせられたりしていく過程で、様々な場面で活用される基本的な概念等として体系化されながら身に付いていくようにした。

また、終末段階においては、どの生徒にも確実に力が付けるよう指導しきることが重要となる。そこで各単位時間において、どの子も「今日の1時間で、このことを学習した」と言えたり、まとめたり、振り返ったりする場と時間を十分に確保するとともに、1時間で学んだことを活用する学習や、繰り返し取り組む学習を位置付け、この1時間でどの子にも確実に身に付いたかを見届ける終末の指導を行った【図表13】。

学習過程を毎時間振り返りながら、学習内容を高めていく

【3年生「2次方程式」第1時の振り返り】

【3年生「2次方程式」第3時の振り返り】

【3年生「2次方程式」第6時の振り返り】

【3年生「2次方程式」第8時の振り返り】

【図表13 生徒による学習の振り返り】

(2) 学び方の工夫

単元や題材のまとまりの中で、生徒が「何ができるようにするか」を明確にしながら、「何を学ぶか」という学習内容と、「どのように学ぶか」という学びの過程を組み立てていくことが重要になる。特に、思考力・判断力・表現力等は、主体的・協働的な問題発見・解決の場面を経験することによって磨かれる。また、身に付けた個別の知識・技能も、そうした学習体験の中で活用することにより定着し、既存の知識・技能と関連付けられ体系化されながら身に付いていく。

そこで、情報を他者と共有しながら、対話や議

論を通じて互いの多様な考え方の共通点や相違点を理解し、相手の考えに共感したり多様な考えを統合したりして、協力しながら問題を解決する活動場面を指導案にも位置付け実践することで、生徒の思考力・判断力・表現力等を高めることを目指した【図表14】。



また、校内研修会においてはS-T分析を取り入れ、教師主体の時間と生徒主導の時間を量的分析し客観的に捉えることで、対話活動をはじめとする学習活動全体が生徒の能動的な取組に結びついているか検証することができた【図表15】。

量の授業分析 (S-T分析)			
① 月日	② 授業名	③ 教師	④ 場所
平成27年10月20日(金)	佐野 美子	体育館	
⑤ 学年	⑥ 教科	⑦ 単元名	⑧ 単元名
1年生女子	保健体育	バスケットボール	

※観覧カテゴリー 1 (T: 上記説明欄... 説明・説明 問い・答え、主観、問い・答え、質疑(8割)、板書、音読 等)
 ※観覧カテゴリー 2 (S: 上記説明欄... 思考・表現、問い・答え、板書、反例・矛盾、精緻化、統合、変換(5割)、演習 等)

時間	活動内容	教師時間	生徒時間
1分	準備運動	100%	0%
2分	準備運動	100%	0%
3分	準備運動	100%	0%
4分	準備運動	100%	0%
5分	準備運動	100%	0%
6分	準備運動	100%	0%
7分	準備運動	100%	0%
8分	準備運動	100%	0%
9分	準備運動	100%	0%
10分	準備運動	100%	0%
11分	準備運動	100%	0%
12分	準備運動	100%	0%
13分	準備運動	100%	0%
14分	準備運動	100%	0%
15分	準備運動	100%	0%
16分	準備運動	100%	0%
17分	準備運動	100%	0%
18分	準備運動	100%	0%
19分	準備運動	100%	0%
20分	準備運動	100%	0%
21分	準備運動	100%	0%
22分	準備運動	100%	0%
23分	準備運動	100%	0%
24分	準備運動	100%	0%
25分	準備運動	100%	0%
26分	準備運動	100%	0%
27分	準備運動	100%	0%
28分	準備運動	100%	0%
29分	準備運動	100%	0%
30分	準備運動	100%	0%
31分	準備運動	100%	0%
32分	準備運動	100%	0%
33分	準備運動	100%	0%
34分	準備運動	100%	0%
35分	準備運動	100%	0%
36分	準備運動	100%	0%
37分	準備運動	100%	0%
38分	準備運動	100%	0%
39分	準備運動	100%	0%
40分	準備運動	100%	0%
41分	準備運動	100%	0%
42分	準備運動	100%	0%
43分	準備運動	100%	0%
44分	準備運動	100%	0%
45分	準備運動	100%	0%
46分	準備運動	100%	0%
47分	準備運動	100%	0%
48分	準備運動	100%	0%
49分	準備運動	100%	0%
50分	準備運動	100%	0%

【図表15 1年生女子「バスケットボール」のS-T分析表】

1年生女子保健体育「バスケットボール」第5時では、「空いたスペースを見つける」「素早く移動」「相手を振り切る」の3つをキーワードに授業を展開した。そして、授業後の研究討議では、グ

ラフの縦軸に注目することで、生徒が主体的に活動する時間が十分に確保されていることを確かめることができた。一方で、教師主導による導入時の課題つかみの時間が多かったことから、「本時、生徒が乗り越えるハードルが3つあったが1つだけに絞った方が、生徒の課題意識をより高めることができた。」「中間反省会の時間も生み出せ、課題到達できる生徒が増えたのではないか。」という活発な意見交換につながることができた。

(3) 職員研修

研究推進委員会では、検討した事柄について研推だよりを発刊し、具体的な方向性を提案するとともに、実践後は実践教科の工夫と成果を他の教科でも共有できるよう、職員会等で確かめ合う場面を位置付けた【図表16】。

研推だより

N0. 3 H29.8.24

1 6月15日 Bブロック研の振り返り

鈴木先生・技術・第2学年「モーニングコール」

◇ブロック研のご意見より

- ・導入時に正しくはんだづけをされたモーニングコールと失敗したモーニングコールを実演することで、生徒は、はんだづけの意味と、正しくはんだづけをすることの必要性を感じることができた。それが、説明をしっかりと聞く姿勢や、正しくはんだづけをしようとする姿につながっている。
- ・2つのモーニングコールの違いの理由を生徒に問いかけるなど提示の仕方については、さらに工夫できる。
- ・はんだづけの手順を示したシートや、模型を示しての説明等により、はんだづけの仕方に対する細やかな配慮がされていた。はんだごての扱い方を丁寧に説明したり、はんだづけの活動を揃ってスタートさせたりと安全面に十分に気をつけられていた。
- ・実習では、ペアで見合い、アドバイスをする姿が多く見られた。はんだづけを個人で行うのではなくペアで見合いながら行うように設定したことがよかった。しかし、ペアで行うことで活動の時間が少なくなるので、今後は、ペアで行うとき、個人で行うときなど場の設定を工夫していくとよい。
- ・課題の「すばやく」「正しく」の必要性が説明されていたが、2つを同時に追うのではなく、今回は「正しく」をメインにしてもよいのでは。また、すばやくの必要性が説明されていてよかったが、「すばやく」とは、どのくらいなのかは、はっきりとしなかった。授業で示した「いち、に、さん」のリズムではんだづけをすることがすばやくと捉えていいのかわからない。
- ・手順や内容、安全面等説明することが多く、生徒が活動する時間の確保が難しい。教えることと生徒に気づかせることをはっきりとさせ、教師の出場をできるだけ少なくなるよう考えていきたい。



◇今後の研究に関わって

① 生徒に課題意識をもたせる提示をする。
生徒が本時何をすればよいのか、見通しをもてるような課題提示をするとうい。
鈴木先生の授業では、はんだづけがうまくできているモーニングコールと、はんだづけがうまくできていないモーニングコールを提示し、2つの音の鳴りが違うことから正しくはんだづけすることを意識付けることができた。

② ねらいをシャープにし、生徒によく分かる課題にする。
単位時間に大切にしたいことは多くあるが、その中でも本時一番ねらいたいことを課題に位置づけ、生徒にすっきりと分かるものにするとうい。教師がねらっていることがぼけたり、生徒が「本時何ができればよいのか」が分からなくなったりするような課題にならないよう気を付けたい。

【図表16 研推だより】

また、職員研修会を実施し、他の先生の方や工夫に触れながら、自己の授業改善についての考えを広げ深めることができる機会を設けた【図表17】。

こうすることで、全職員の共通理解のもと研究を推進できる体制を整えるとともに、教師一人一人の授業力の向上を目指した。

多治見市立南郷中学校
「学力向上推進事業」職員研修会
文責 研究推進委員長

7月5日(水)の第1回「学力向上推進訪問」では、全校研究提案授業を通して、園原久徳指導主事より次のことを指導・助言いただきました。

①「見通しをもたせる指導をすると学力は付く」(本校研究構想：指導方法の工夫Ⅰ)

②「既習の学習内容を活用すると学力は付く」(本校研究構想：指導方法の工夫Ⅱ)

③「学力を付けるためには、実感の伴った理解をさせることが重要であり、そのためには生徒の主体性を生み出す指導は大切」

本校は主体的な学びを生み出すために、進んで関わり合い、考えを高め合うとする対話・交流活動を学びの中に位置付けようとしています(本校研究構想：学び方の工夫)。そう考えると、園原久徳指導主事が言われたことから、本校の学力向上に向けた授業改善の方向性に誤りがないことを確かめることができます。

その一方で教育長訪問では、「教師の授業改善に対する意識の差が、授業に向かう生徒の姿となって現れている。教師一人一人が、授業改善に向けて高い意識で取り組んでほしい。」と指摘を受けたことも事実です。また、校長先生は「同僚性はできつつある。教科指導でも、生徒指導でも、いい姿は互いに学び合い、まずいと感じることは指摘し合える職員集団にしたい。そして、教科指導、生徒指導で先生方一人一人の力量を上げてほしい」と望んでいます。これらのことから、教師一人一人が積極的に授業改善に向けて努力し、さらに教科指導の力量を上げていかなければならないことが分かります。

そこで、以下のように職員研修を実施します。

- 1 目的 授業改善に向けての取組を交流し合うことを通じて、他の先生方の授業改善についての考え方や工夫を取り入れたり、自己の授業改善についての考えを広げ深めたりできるようにする。
- 2 期日 平成29年9月27日(水) 14:30~16:20
- 3 場所 南舎2階 会議室
- 4 内容 授業改善に向けた実践交流
 - (1) グループ別交流
 - ①授業の中で、何をねらい(授業の意図)、どんな工夫(授業改善)をしたか。そのときの生徒の反応(手応え)について発表。

(交流の視点(授業改善のポイント))

 - ・見通しをもたせるための指導の工夫(場面、方法、等)
 - ・既習の学習内容の活用(場面、方法、単元・単位の時間的系統性の捉え等)
 - ・対話(交流)活動の位置付け(場面、方法、内容等)
 - ・他の主体性を生み出すための工夫(場面、方法、等)

 - ②質疑応答(工夫について、さらに細かく確かめたいこと)
 - ③他の教師からのアドバイス(自分だったら、こんな工夫を考える。こんな活動を位置付ける)
- (2) 全体発表
 - ・グループ別交流で出た、主な意見や工夫の発表

- 5 準備 9月~11月で実践を予定している授業の指導案(研修訪問、ブロック研の指導案と兼ねることは可)
※9月1日(金)までに研修長まで提出

【図表17 職員研修会実施要項】

(4) 学習内容をつなぎ、授業を補充するための充実した家庭学習の在り方

本年度、本校では、家庭学習を『学習塾・家庭教師などを利用した学習を除く、家で自主的に行う学習時間』と定義した。そして、学力の基礎・基本の確実な定着を図るため、全校90%以上の生徒が、1週間で家庭学習7時間以上(1日平均1時間以上)実施できることを目指し、全校で次の3点に取り組んだ。

①家庭への協力依頼

PTA 総会後の各学年懇談会で、生徒の実態、家庭学習の取組状況について情報を提供し、生徒の現状を理解したうえで、家庭学習について協力を仰いだ【図表18】。また、保護者にも学習のてびきを配布し、保護者から生徒自身にどんな学習をどのように取り組めばよいか助言できるようにした。



【図表18 PTA 懇談後の各学年懇談会の様子】

平成29年度

学習指導部

1. I期の姿

I期の姿 学習指導目標と指導の重点

『学習の仕方を身に付けよう』

I期の目標

目的意識的な学習習慣を確立する。
 学習の仕方を身に付け、相手を見て、話し、聴いたり、読んだりしよう

家庭学習 家庭学習の仕方を理解し、確実に取り組もう

- (1) 5Aを目指す授業
 - 昨年度後期からの授業で、5Aを目指す授業の意識が高まり、4月はオール5Aの日が、3つの学級であった。
 - 5Aをとるため、教員、学習係長が呼びかける姿があった。
 - 4月のスタート時に、5Aを目指す生徒が増え、5割程度まで増えている学級がある。

- (2) 話す・聴く
 - 各学年で実態は異なるが、1年度に比べ、全体的に落ち着いて話を聴く雰囲気がある。
 - 1年生は、話し手が話している位置に移動して話す、聴き手は話し手の方に体を向けて聴くなど、よい姿が見られている。この姿を認め、継続できるようにしていく。
 - 話し手が、聴き手を見て話を進め、聴き手が話し手を見て話を聴く姿を確認しながら、話しを始めていくことがある。
 - 話を聴いている生徒が、話し手が話している音に反応して、目を向ける姿が見られる。
 - 話し手が話している音に反応して、落ち着いて聴けない姿がある。

成果と課題

- (3) 家庭学習
 - 生活記録ノートを見ると、1年生は9割近くの生徒が1週間に7時間取り組んでいる。
 - 2、3年生は生活記録ノートの提出率が低いこともあり、5割程度の生徒が1週間に7時間の家庭学習に取り組んでいると考えられる。

2. II期の重点と願望

学習指導目標と指導の重点

『積極的に取り組もう』

II期の目標

目的意識的な学習習慣を確立する。
 学習の仕方を身に付け、相手を見て、話し、聴いたり、読んだりしよう

家庭学習 家庭学習の内容と時間を充実させよう。

具体的方途

- (1) 5Aを目指す授業
 - 学習委員会を中心に、5Aを目指す授業に取り組んでいく。今年は、学習評価の日(月末)の5Aの数だけでなく、月で獲得した5Aの数もカウントすることで、ひと月にわたる取り組みを振り返ることができるようにしていく。
 - また、授業評価の日の翌日の放送は、お昼の放送ではなく、朝の会前に入れるようにして、翌日の授業につなげるようにしていく。

- (2) 「話す・聴く」指導
 - 聴く姿勢をつくるのに、時間のかかる生徒もいるが、全員が聴くということにこだわり、教師ができるまで根気よく待ち、指導していく。教師は生徒が合っていることをやめ、話し手に目や耳を向けて聴こうとしているのか、しっかりと見届け、話し手が聴いていないまま、すぐに話出をしようとしているのか、しっかりと待つなど、声をかけ、聴き手を意識させる。また、授業では、聴きながら書くことをやめさせ、書く時間を保証し、聴く時、書く時を区別させる。
 - 反応しながら聴くことについては、顔を見て聴いたり、拍手したり、「わかりました。」と応えたりして、反応している様子を確認、価値付けすることで、反応して聴く姿を広げていく。「(「～さんは、うなずいて聴いていたね。」「拍手があつて、いいね。」「反応してくれた人、ありがとう。」など)
 - 話す姿勢では、声の大きさは個人差があるが、仲間に聞こえるように話そうと意識させる声「みんなに聞こえる声で」「もう少し、大きな声で、がんばって」

具体的方途

- (3) 家庭学習
 - 1週間に7時間以上の家庭学習に取り組んでいるのかを見届け、生徒に意識付けさせるため、生活記録ノートに記入させることを徹底し、担任が見届け、生活記録ノートの提出が悪い学級等は、月曜日の朝の会等で時間をとり、生活記録ノートに確実に記入させる。もし、生活記録ノートを持っていない生徒があれば、コピーしたものも記入させる。
 - 学級のみならずどのぐらい家庭学習をがんばっているのか分かるようにするため、学年の実態に応じて、頑張る表を作り、示していくこととする。
 - (例) ・班ごとに7時間以上達成した人を数え、シートを貼っていく。
 ・班ごとに1週間の学習時間を合計し、何時間学習できたかをグラフにする。
 - 実力テスト、中間テストが終わり、夏休み後は前期期末テストがあるので、返却されたテストを活用し、目的意識を持って学習できるようにしていく。

3. スキルトレ

- ① 8:13分 机を空ける(鉛筆、教科書のみの準備、問題配)
- ② 8:16分 問題配を解く(3分間に変更)
- ③ 8:16~8:20 答え合わせ→教え合い(4分間)
- ④ 8:20 黙想の音楽が鳴り始める。机上の片付け。黙想準備。
- ⑤



【間を空けて机を整えて、問題を解く】



【教え合いの例1 班で教え合う】



【教え合いの例2 隣同士のペアで説明し合う】

【図表19 職員会提案資料】

②No テレビ・No ネット

小中連携で家庭学習強化週間を設定し、家庭学習に取り組める環境を意図的に生み出した。生徒の意識調査より、家庭学習ができない要因の中に「テレビや携帯電話等のネット環境が家庭学習の妨げになっている」という家庭環境に起因するものも含まれているので、定期考査前1週間を家庭学習強化週間とし、家庭に「No テレビ・No ネット」を働きかけるようにした。

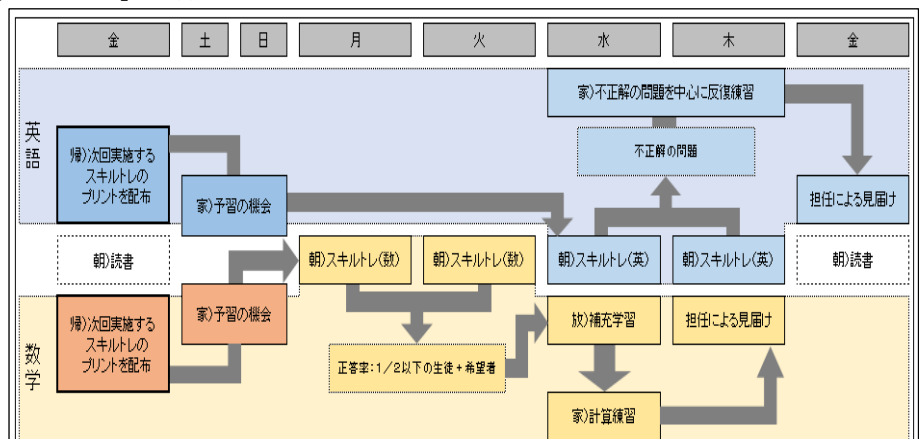
③学習指導提案の共通理解・共通行動

年度当初の学級活動の時間を利用して、家庭学習の意義や必要性、「家庭学習のてびき」の活用方法等について全校指導し、家庭学習についての意識を高められるようにした。また、学習指導部の取組の重点の一つとして家庭学習を位置付け、期の目標と具体的方途を系統的に捉え提案することで、実態に即した取組を、全校が共通理解・共通行動できるよう体制を整備した。【図表19】

(5) 既習の学習を学び直すスキルトレーニング

本年度は、【図表20】の流れで、英語と数学のスキルトレーニングを実施し、既習の学習の学び直しを図った。これに加え数学では、前の週の授業前の3分間学習で、翌週に行うスキルトレーニングの問題を扱い、問題の解き方を班ごとで交流し合う場を位置付けた。

数学では、スキルトレーニングの正答率が1/2以下の生徒を対象に補習を行い、計算技能を学び直すこととした。英語については補習を行わないものの、間違った語句を中心に反復練習することにした。



【図表20 スキルトレの実施方法】

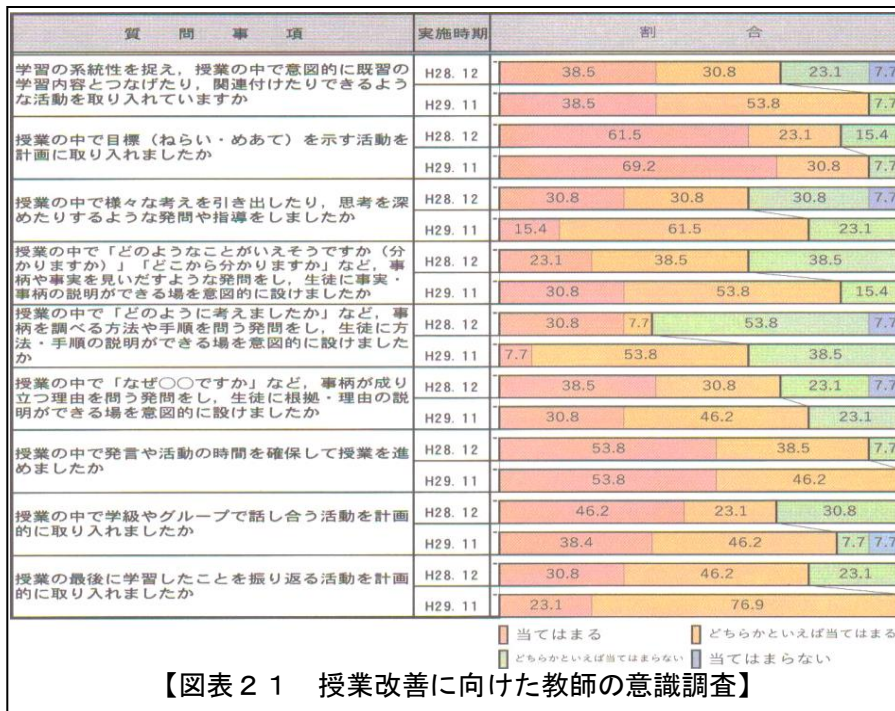
3 実践の結果

前述したように、本校では、教師の授業力向上と生徒の学習習慣の改善を図れば、生徒一人一人の学力を向上させることができると考え、実践を重ねてきた。その結果は次の通りとなった。

(1) 教師の授業力向上に向けた取組

【図表 2 1】は、昨年度12月と本年度11月に実施した「授業改善に向けた教師の意識調査」の結果を比較したものである。

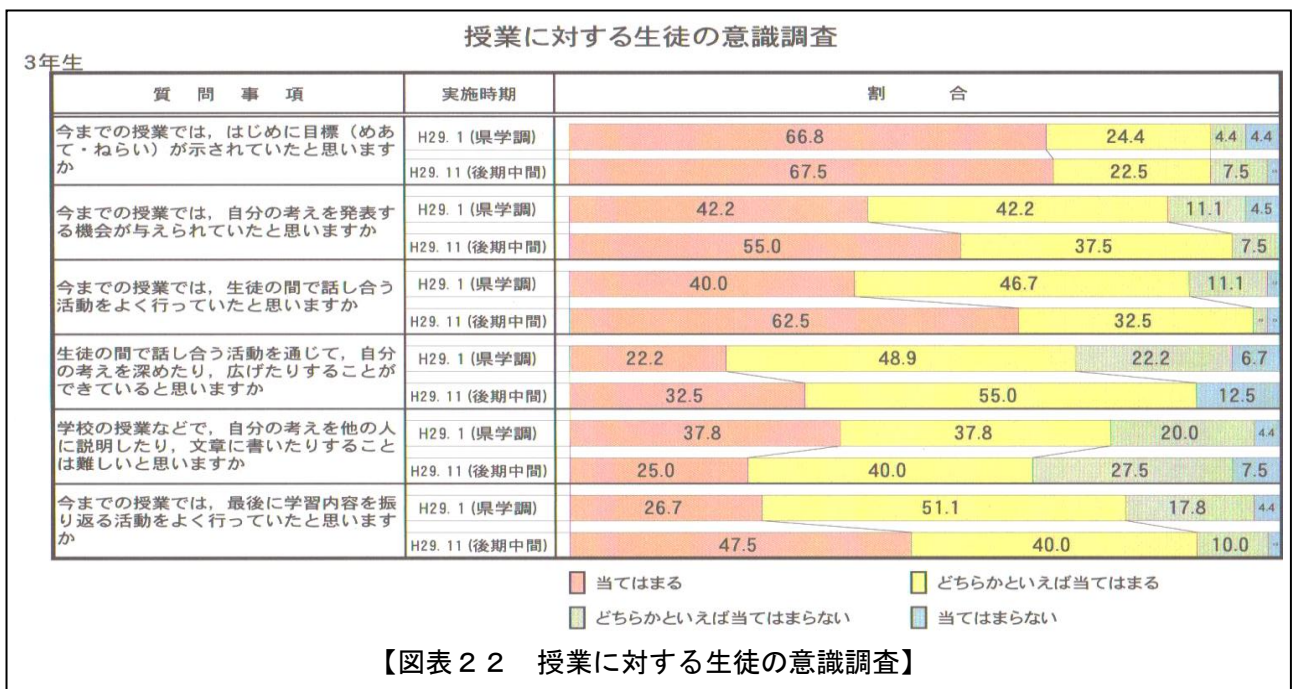
どの項目においても、「当てはまる・どちらかといえば当てはまる」の割合が、昨年度よりも伸びていることが分かる。



つまり、この結果は、教師自身が「系統的な学習の捉えのもと、学習させたい事ごらを明確にし、発言の場や対話的な活動を位置付けたり、学習過程を振り返らせたりしながら、生徒の考えを深め広げられる授業」を目指し、進んで授業改善に取り組んできたことを示している。

こうした教師の自己評価が、生徒の学習にどう結びついているのかを示しているのが、【図表 2 2】である。【図表 2 2】は、現3年生の授業に対する意識調査の結果を、岐阜県学習状況調査（平成29年1月実施）時と本年度後期中間テスト（平成29年11月実施）時を比較したものである。

教師の自己評価同様、「当てはまる・どちらかといえば当てはまる」の割合が、昨年度よりも伸びており、昨年度よりも生徒自身が「自分の考えを発表する機会が増えた」「仲間と関わり合い、問題解決に向けて話し合う機会が確保されるようになった」「学習内容を振り返り、自己の変容を自覚できるようになった」と捉えていることが分かる。そして、『自分の考えを深めたり、広げたりできるようになった』『以前よりも説明することに対する困難さは減少した』と、自己の伸びを実感できるようになってきていることも分かる。



(2) 生徒の学習習慣の改善に向けた取組

①家庭学習についての取組

家庭学習の実施状況がどのように変化したのかを【図表23】に示した。昨年の12月に比べ、「1週間の家庭学習が7時間以上」の生徒の割合は32.3ポイントの伸びを示している。また、「しない」の生徒の割合は、マイナス10.2ポイントを示していることから、全校的に学習習慣の改善が見られ、少しずつではあるが取組の成果が表れていることが分かる。

中でも、本年度初めて実施した「Noテレビ・Noネット」の取組では、生徒の75%が「集中して勉強することができた」と振り返ったり、50%の生徒が「家族の協力が得られた」と回答したりした。このことから、家族と共に学習しやすい環境をつくって学習に取り組むことの有用性を実感することにつながったと考えられる。また、73.5%の保護者から取組の趣旨に賛同をいただくことができ、「取組をきっかけに、子どもは集中して取り組めることができた」「子どもが集中できるように、家族として協力できてよかった」など、家庭との連携が家庭学習の充実に効果的に働くことも明らかになった【図表24】。

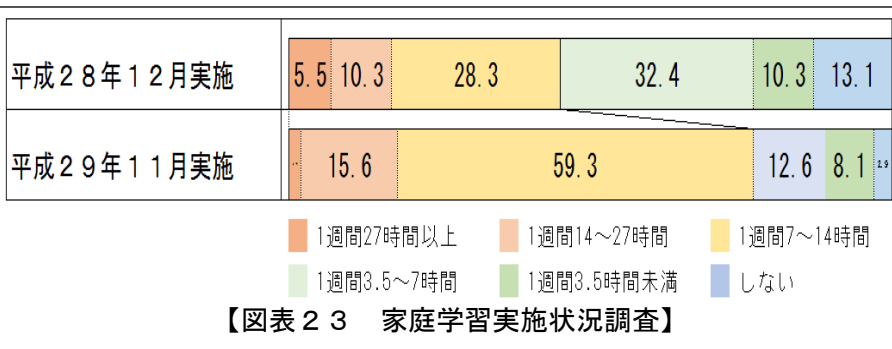
②スキルトレーニングについての取組

【図表25】は、スキルトレーニング（数学）の正答が1/2を下回り、補習に参加した3年生A学級の生徒名簿の一部を示している。

前期前半（4月～7月）																	
NO	氏名	性	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
1		女															
2		女															
3		女															
4		女															
5		男															
6		男															
7		男															
8		男															
9		男															
10		男															
11		男															
12		男															
13		女															

後期前半（10月～11月）									
NO	氏名	性	33	34	35	36	37	38	39
1		女							
2		女							
3		女							
4		女							
5		男							
6		男							
7		男							
8		男							
9		男							
10		男							
11		男							
12		男							
13		女							

【図表25】 スキルトレーニング補習参加者名簿



〈生徒用質問紙回答〉	〈保護者用質問紙回答〉						
<p>Q. 我が家の約束宣言は何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> テレビを見ながら勉強しない。 テレビはニュースだけにする。 スマホは1日30分までにする。 勉強が終わるまで、テレビやネットはしない。 ゲームをやる前に1時間半は勉強をする。 9時以降はテレビ・ネット禁止。 1日テレビ・スマホは1時間まで。 テスト前5日間はスマホを預ける。 家族全員がテレビを見ない。 テスト2日前からテレビを見ない。 	<p>Q. 取組の趣旨に賛同し、取り組みましたか。</p> <table border="1"> <tr><td>はい</td><td>97人(73.5%)</td></tr> <tr><td>いいえ</td><td>16人(12.1%)</td></tr> </table>	はい	97人(73.5%)	いいえ	16人(12.1%)		
はい	97人(73.5%)						
いいえ	16人(12.1%)						
<p>Q. 活動に取り組んでの成果は何ですか。</p> <table border="1"> <tr><td>集中して勉強ができた。</td><td>99人(75%)</td></tr> <tr><td>家族の協力が得られた。</td><td>66人(50%)</td></tr> <tr><td>家族の対話が増え、絆が深まった。</td><td>50人(37.8%)</td></tr> </table>	集中して勉強ができた。	99人(75%)	家族の協力が得られた。	66人(50%)	家族の対話が増え、絆が深まった。	50人(37.8%)	<p>Q. 感想・意見を教えてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> テスト勉強に集中するため、この取組は良かった。 いつもより集中して勉強に取り組めて良かった。 初めはできるか心配でしたが、約束事を決めるとちゃんと取り組みました。個人ではなかなか難しいですが、学校側が提案して下さるとありがたいです。 テスト勉強中は家族も協力していたので、良いことだと思いました。 今までは子どもの勉強に親として声をかけることはあったが、今回はさらに子どもが集中できるように協力できたので良かった。
集中して勉強ができた。	99人(75%)						
家族の協力が得られた。	66人(50%)						
家族の対話が増え、絆が深まった。	50人(37.8%)						

【図表24】 「Noテレビ・Noネット」アンケート結果

【図表25】を見ても分かるように、前期前半の補習参加人数に比べ、後期後半は参加人数の減少が見られる。特に前期前半は、同じ生徒が毎回補習に参加するという傾向を読み取ることができ、ある特定の生徒の基礎的・基本的な技能が定着できていないことが分かる。しかし、後期前半には、補習者の数自体が減少し、前期前半のような傾向も見られなくなった。さらに、昨年度は常に1回当たりの補習に12,3人を超えた参加者がいたことを考えると、本年度のスキルトレーニングの実施方法により、学習の学び直しが円滑に行われ、生徒一人一人の基礎的・基本的な技能の定着に効果を示していることが分かる。

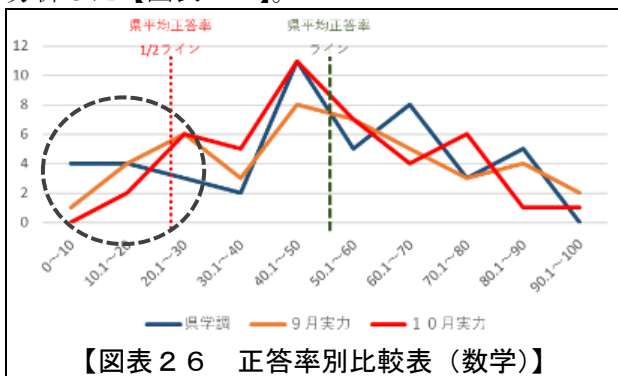
4 成果と課題

前述したように、【図表7】による分析から、「国語・社会・数学の3教科については、県平均1/2以下の生徒の底上げが必要」であること、「理科・英語については、全体的に確実に学習内容の定着を図れるよう早急な対応が求められる」ことを明確にして、本実践に取り組んだ。

そして、現3年生の岐阜県学力状況調査（昨年度1月実施）並びに、9月実力テスト及び、10月実力テストの正答率を追跡調査し、その変容を比較することにより、本実践の成果と課題を検証することとした。

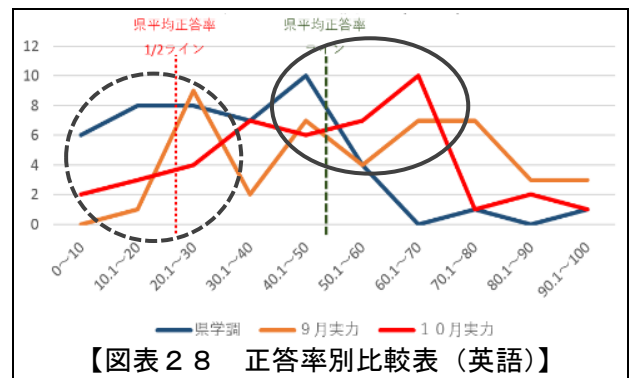
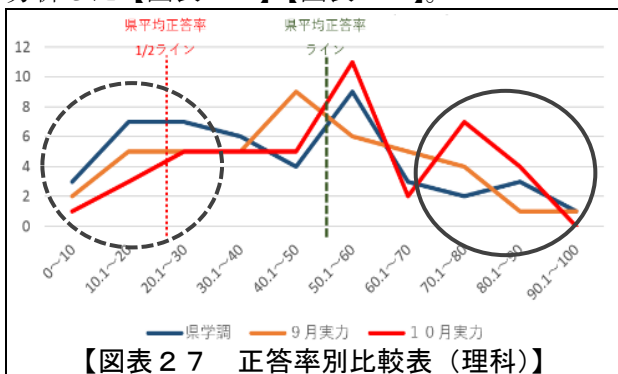
(1) 成果

数学においては、県平均正答率1/2以下の部分（破線の○）を中心に見て、岐阜県学力状況調査（青）と9月実力テスト（橙）、10月実力テスト（赤）の正答率分布別グラフの位置関係より比較分析した【図表26】。



破線部のグラフの高さは、岐阜県学力状況調査（青）と9月実力テスト（橙）、10月実力テスト（赤）と時間の経過とともに徐々に低くなっていることが分かる。このことから、県平均1/2以下の生徒の学力の底上げがなされ、生徒の学力向上に結びついたと考えることができる。

理科・英語については、県平均正答率1/2以下の部分（破線の○）と山（最頻値）の位置（実線の○）を見ながら、正答率分布別グラフより比較分析した【図表27】【図表28】。



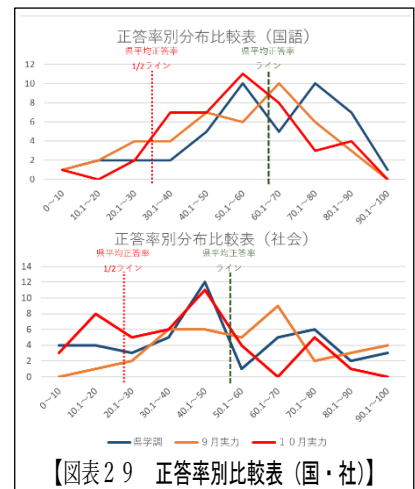
破線部のグラフの高さは、理科・英語ともに、岐阜県学力状況調査（青）と9月実力テスト（橙）、10月実力テスト（赤）と時間の経過とともに徐々に低くなっている。また、理科については、実線部の山は、時間の経過とともに徐々に高くなっている。英語については、実線部の山は、時間の経過とともに右に移動していることが分かる。

これらのことより、理科・英語については、岐阜県学力状況調査時に比べ、県平均1/2以下の生徒の学力の底上げがなされるとともに、中位層の学力の向上も見られたことが分かる。

(2) 課題

一方、国語・社会では、前述の3教科のような傾向を捉えることができず、生徒の学力向上という成果を得るところまで至らなかった。

国語・社会については、授業の指導方法や学び方など、有効な手立てを模索していくとともに、スキルトレーニングの導入も検討する必要がある。



(3) 考察

生徒の意識の高揚や、家庭学習時間の増加などに伴う正答率の変容から見ても、教師の授業力向上と生徒の学習習慣の改善が、生徒一人一人の学力向上につながるという一定の手応えを得ることができた。今後もこの取組を継続しつつ、教科の枠を超えて、指導方法の交流・改善を積極的に加えていくことが、一層重要になると考える。